

母なる大地を求めて

家城絹代

社会福祉法人聖霊会聖霊病院

「京都の池田です」と素敵に声に、嬉しさと懐かしさが響きました。彼女、お容さん(池田容子さん)は、聖霊病院在職中に多くのことを語り、そして看護の喜びを共にした友人の一人です。1980年に「いつもいっしょ」という小さなお人形を残し、京都に戻って行ったあの日が、昨日のここのように思い出されます。そして、幸福そのものを写し出したような彼女の「手づくり結婚式」を思い出し、思わず「りれ一随筆」をひき受けました。「あいあい助産院」での貴女の看護を応援しながら、私の助産婦としての看護を振り返ってみたいと思います。

さよなら あんころもち また きなこ

私が、長女彩を出産したのは15年前。分娩台での初対面は、何ともみずみずしい可愛らしい女の子でした。そして二女薫の出産は、1年7カ月後。私の産道をスルスル、ニョロニョロと通っていった感触は今でも身体が覚えています。薫は、私にそっくりの子でした。それから私たち夫婦の育児奮戦が始まりました。私の病院勤務を心から支えてくれた夫は、保育園の送り迎えを可能な限りしてくれました。

名古屋でも例年にない大雪が降ったあの日、朝6時に家を出て登園した際、寂しそうな長女と今にも泣きだしそうな二女の手を握りしめ、「さよなら／あんころもち／また／きなこ」と歌いました。握手をした温もりは、二人のわが子に何か通じるものがあったようでした。それ以降、登降園時は、いつも握手をすることに努

めたものです。

それから8年後、長男智を出産しました。若草物語を夢にみていた私ですから、妊娠中は子供たちと一緒に「まりあちゃん」と命名し、お腹をさすり呼んでいました。その子は何と「まりおちゃん」に早変わりをし、夫の期待にそった子供として生まれてきました。智はわが家の「スーパーマリオ」です。この子が私に教えてくれたのは、生後1カ月余の頃、乳腺炎で切開手術を受けた時でした。痛みと心のストレス・ジレンマにかかっていた時、いつもほほ笑みかけてくれました。そして、一時は断乳したものの、子供の日に直接母乳を再開した時のあの嬉しそうな目は、私にとって素晴らしい体験で、思わず感謝で一杯でした。

子育て奮戦期が私たちに教えてくれたのは、お金には換えられない夫婦の絆でした。

お産マシンにならないで!

15年前、私が聖霊病院に出向いた時、シスター・ボニタスが迎えてくれました。広い広い心のあたたかい印象を受けました。今までに出会ったことがない不思議な思いで、そのまま入職してしまいました。シスターの素朴な助産婦の姿に、その時から大ファンになりました。

分娩数は月約150件でしたが、分娩室でも病棟でも一人一人の産婦さんを大切に看護し、分娩に導き、そして分娩後は温かく包み込み、人として相手を尊重した言葉かけがされていました。まさしく、私が求めている看護の心でし



た。今も私たちは、その心のものさしを大切に育て、生かし続けて、悩みながらも喜びに変えていく看護を進めています。

一人の女性にとって、あの妊娠期間は掛け替えのない280日間です。そのステップを乗り越え我が子を手の中に抱くまでの分娩期は、苦痛と希望との戦いです。「ねえねえ、お母さん聞いて」という胎児の声とともに、今までに味わったことのない痛みを身体で感じる産婦さんを心から支え、応援していく看護は、計りしれない力が必要です。そして育児期、乳幼児の命をふくらませていくには、両親の愛情が不可欠です。その愛情とは、いつどんな時でも身体に触れ、時には叱り、いつも温かい心で包み込むその広い心だと思っています。まさしく、見守る心と行動だと思います。一人の女性に出会った時、その女性への私たちの看護(見守り)が始まり、そして、一人の子を未来に送り出していくために母性の看護があると思います。

多くの出会いで心を磨く

私は友人から、ある本を紹介されました。キラキラ輝いていた30代が過ぎ、すんなりと40代を迎えてしまった私ですが、「40を過ぎたら女としてではなく、人として問われる。つまり、人として、どう生きるかということ、美しさというものは、おのずから後からついてくるもの」と、その本にはあります。結婚15年、妻として、母として、人として、看護者としての自分を磨き、これまでの自分を振り返りつ

つ、美しい40代を過したい気持ちで一杯です。

私は看護の道に入り、たくさんの方と良い出会いをしています。「スバルちゃん」として私を支えてくれる人、名古屋の友人はいつも本物の看護をみつめることを教えてくれ、悩みを認め助言を与えてくれる人、小・中・高生の先生方(思春期の子供たちと真正面からぶつかっている人)、いつも子供たちの心を素直にみつめている保母さんたち、そして何よりも、看護に生きる原動力を私に与えて下さった西川美枝先生、藤倉勝弘先生、松浦喜代子先生とそのスタッフの方々にお会いでき、私の心はよみがえったといっても過言ではありません。本当にありがとうございました。

「施設内助産婦」にも、患者中心の看護を実現していくための糧と幅のある活動ができることを確信しています。それは、「母なる心」があればこそ実現していくことを知りました。母なる心に裏打ちされた助産婦の仕事は、出会いがあればこそ成り立っていくものと思います。最後に、いつも私に素敵なエネルギーを下さる聖霊病院のスタッフの方々に感謝致します。そして、お母さん方々に……。

* * *

次にバトンタッチするのは、名古屋の中川区でフリー助産婦として、地域のお母さんたちの間で光のような存在で活躍している沼田睦美さんです。彼女の人柄は、ほれぼれするところがたくさんあります。尊敬している先輩の一人です。よろしくおねがいします。